

愛は忍耐強い

副会長 嶋田順好

現代を生きる私たちが身につけておかなければならない大切な資質として、時間を組織的・合理的に無駄なく利用する力というものがあるように思います。仕事をする上で適切な時間管理ができず、納期に間に合わせる事ができないとか、会合や待ち合わせにいつも遅刻をしていたら社会人としては信用されなくなってしまいます。

多分、明治時代の庶民は、腕時計などを持っている人は殆どいなかったでしょうから、正確に時を知ることも簡単ではなかったでしょう。それだけに5分、10分という時間の食い違いは誤差のうちであって、それほどナーバスに時間厳守ということが求められなかったのではないかと思います。しかし、現代では、多くの人が秒刻みとまではいかなくとも、分刻みで正確な行動をとることが求められるようになってしまいました。たしかに時間厳守は大切なことですが、そのような現代人のライフスタイルの変化が、ある意味愛の喪失という問題にも関わっていることを見落としてはならないと思うのです。

新約聖書のコリントの信徒への手紙Ⅰ13章は「愛の賛歌」と呼ばれ、キリスト教の結婚式でもしばしば朗読されます。その4-7節で使徒パウロは「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」と記すのです。ここでパウロは畳み掛けるように、短い文章の中で15もの動詞を用いて、愛のいろいろな面について浮き彫りにしています。ある意味、愛を語るにとしては、極めて平凡で日常的な事柄が語られていると言えなくもありません。めくるめくような、輝きに満ちた情熱あふれる言葉は、一つも記されていないのです。この事を通して、愛は日々の日常の事柄をおろそかにしないで、その生活のただなかで現わし、生きて行くほかないものであることを、私たちは知らされるのです。

しかし、なんの変哲もないような文章の「愛」という言葉の中「私」という言葉を置き換えて読んでみたらどうなるでしょうか。「私は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。私は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」となります。いままで気楽に読めていた言葉が、にわかに重い問いかけを含んだものとなって迫って来ることはないでしょうか。だれ一人、このように歩んでいると言い切れる人はいないでしょう。だから、愛に生きることは、私たちにとって全生涯を貫く問いかけであり課題であるに違いないのです。

ところで、この短い文章の中に出てくる愛の色々な姿を表す動詞の中には、実に多くの「忍耐」という事柄と関連する言葉が出てきます。「全てを忍び」、「全てに耐える」は勿論の事、「苛立たない」という言葉も、愛に生きている者が、争いや嫌な出来事の中にあって、じっと耐えている姿をさしています。また、「恨みを抱かない」ということは、隣人が自分にした悪事を数えないということでしょう。それはある意味で、もっとも困難な忍耐を必要とすることではないでしょうか。忍耐、それは望みをもって待ち続けることを意味します。相手が自分の思うようにならない時に苛立たない、短気にならない。そこでこそ、相手が変わることを願うよりも前に、まず自らが変えられ、よき助け手として傍らに立つと

ということです。それは、時間を支配し、便利で、快適な生活に慣れきってしまった現代人が、次第に忘れつつある、人間にとってなくてはならない、生きていく時の大切な姿勢であり、病と闘う人を看取る看護の場でも、真っ先に求められる姿勢ではないでしょうか。

「忍耐」ということで、私が思い起こす一人の人物がおります。動物行動学者で、「刷り込み」という動物の習性を研究したことでノーベル賞を受賞したコンラート・ローレンツという人です。彼は『文明化された人間の八つの大罪』という本の中で、現代の科学技術の驚くべき進歩と発展が、人類にかつてない、快適で、便利な状況をもたらしたが、反面、そういう便利さ、快適さが精神的にも、肉体的にも私達の生物としての耐える力を弱める側面を持っていることも忘れてはならないと警告するのです。要するに私たち現代人は、知る知らずのうちに、皆、温室育ち、籠の鳥になってはいないかということでしょう。その中で、私達は次第に忍耐する力を喪失している、愛する力を喪失している、我がままになっている。そういっても良いのかも知れません。

「忙しい、忙しい」という人が増えています。斯く言う私も例外ではありません。しかし「忙しい」とは「心」が「亡びる」と書きます。忙しい人はいつもいらいらして、待つことができません。まわりの人に対しても、ああしなさい、こうしなさいと常に指示し、命令し、いつのまにか自分の思いとおりに相手を支配し、動かそうとしてしまいます。現代人はみな、この「忙しい症候群」に取りつかれています。もちろん、仕事の中では時間を組織的、合理的、効率的に用いなければなりません。しかし、ホスピス・ケアの急所は、患者さんと向き合うときに時の流れを意識することなく、「すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」愛をもって向き合うということにあるのではないのでしょうか。それを実践することは容易なことではありません。その時間を確保するためにも、別のところで時間を組織的、合理的、効率的に使い続けることが必要になるでしょう。しかし、病室で赴くときには、大きく息を吸って気持ちを切り替え、患者さんの心にしっかりと寄り添うことを心掛ける者でありたいと願うものです。